



学校だより

<https://www.edu.city.yokohama.lg.jp/school/es/yokohamafukayadai>

令和6年8月30日

9月号

横浜市立横浜深谷台小学校

校長 角井 治朗

活動の意義を考えることの大切さ

校長 角井 治朗

夏休みが終わり、再び学校に活気が戻ってきました。暑い日が続くとともに、8月中旬頃からは、次々と台風が発生するなど天気も心配されましたが、久しぶりに会う子どもたちは、身体も一回り大きくなり、たくましくなったように感じます。この夏休みの経験や過ごした時間が、子どもたちのこれからの更なる成長につながればと願っています。

さて、夏休みを利用して、日頃なかなかじっくり読むことのできず取り溜めていた新聞記事などに目を通していました。その中で一つ、目に留まった記事がありました。それは「文部科学省、学校での生成AIの活用方針を議論するための有識者会議を設置」（2024.8.5 日本教育新聞）というものです。すでに「生成AI」という言葉はいろいろな場面で耳にするようになり、しかもそこで見聞きする内容から、AIがものすごいスピードで進化している様子も感じられます。教育との関わりでは、一部で授業に活用する事例なども見受けられますが、一方で、子どもたちが文章を書いたり考えたりする力を身に付ける際の弊害になるのではといった心配の声もあります。そのような中、使うことの可否から一歩踏み込んで、いよいよ「活用」について議論する段階に来たのだと改めて感じました。

そこで、試しに自分でも、この夏に読んだ本を題材にして、夏休みの宿題の定番「読書感想文」をAIで作成してみました。その結果は…、用いる言葉や表現の仕方を見る限りは、絶対に自分では使わないと感じる部分がたくさんありましたが、書かれている内容は本の趣旨に合っており、文章の構成も日本語として違和感のないものに仕上がっていたのです。仮に子どもたちがAIを使って読書感想文を書いてみたとして、もちろん担任には、それが本人によって書かれたものかどうかはすぐに判断がつくでしょう。しかし、どこから書き始めたらよいかと途方に暮れている子どもには、参考になる部分もあるかも知れません。

「AIは包丁と同じ道具」ということを述べていらっしゃる方もいます。使い手である人間の考え方ひとつで良くも悪くも使えてしまう、だからこそ、何の目的で、その道具を使うのかを明確にすることが大切であるということです。（札幌国際大学准教授・安井政樹・月刊「日本教育」令和6年7/8月号）AIの台頭によって私たちに突き付けられているのは、どうAIを活用するかの以前に、「何のためにそれをするのか。」を考えることなのかも知れません。学校での学習に立ち返れば、例えば「読書感想文」を書くことが目的なのではなく、それによってどんな力を身に付けられるようにしたいのかを明確にし、それを子どもたちにしっかりと伝えていくことが大切であるということです。

いよいよ夏休みが終わり、前期もまとめの時期に入っていきます。元気に登校してきた子どもたちですが、中には、久しぶりの学校に不安やストレスを感じているケースも少なくないのではないかと思います。子どもたちの様子にしっかりと気を配りつつ、これからも学ぶ意義を子どもたちと共有できるような授業づくりに向けて、歩みを進めていきたいと考えています。